
緑の巨人、荒野を往く

烏天狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑の巨人、荒野を往く

【Nコード】

N5369X

【作者名】

烏天狗

【あらすじ】

1話から4話まで改訂しました。読みやすくなったと思います(10/22、20:09)

進撃の巨人×機動戦士ガンダムのクロスオーバー！。

巨人にMSをぶついたらどうなるのか？

そんな疑問からノリで書いてみました

基本、ご都合主義です。作者は文章能力に難があるため1人称と3人称の区別がいまいちです。

誤字、脱字、文章のおかしな点がありましたらご指摘くださると幸いです。

また原作に追いついた場合、新刊がでるまで更新を停滞するかオ리지ナル展開にしようと思ってます。

アイデアありましたら提供お願いします

ソロモンにて（前書き）

面白かったから書いてみた。反省はしているが後悔はしていない

ソロモンにて

宇宙世紀0079。

サイド3、ジオン公国の宣戦布告から始まった地球連邦との戦争は大きな節目を迎えていた。

『星一号作戦』

地上からジオンを駆逐した連邦軍による宇宙反攻作戦、ジオン公国のソロモン要塞攻略作戦である。

迎え撃つはソロモン要塞司令、ドズル・ザビ。その戦力は圧倒的な物量を誇る連邦軍に劣っていたが、宇宙こそ、我らの戦場と兵士等の士気は高かった。

戦いは熾烈を極め双方に被害が出た。そしてサイド5の暗礁空域に展開したティアンム艦隊によるソーラーシステムの照射により勝敗は決した。

この物語の主人公、コウスケ・フルカワ中尉もソロモンで戦った戦士の一人である。

『こちら221小隊！ 光が！ 光がソロモンに！！』

『Sフィールドの要塞砲群が沈黙した！ いったいなにが起きているんだ！』

『光を食らったムサイが爆沈したぞ！ なんだあれは！』

混乱した通信が次々と入ってきた。Sフィールドは壊滅。未だに光はソロモンに降り注ぎ続けている。

俺、コウスケ・フルカワは地上からの愛機であるMS-06J改

の操縦桿を握りしめた。状況はわからないが、Sフィールドはこの戦域のすぐ隣だ。手をこまねいてはまずい。

「コンドウ、キムラ！！ ただちに全力後退！！ ソロモンの真裏まで逃げるぞ！」

「ちょ、小隊長、正気ですか？」

「敵前逃亡は軍法会議に銃殺ですぜ！」

「うるせえ！ このままだったら連邦の新兵器にこんがりローストされんだろつが！！ つべこべ言わずについてきやがれ！」

機体を反転させ、スラスターをいっぱい吹かす。推進剤が一気に減少していく。出し惜しみなんてしている場合じゃない。

「小隊長、待ってください！」

「置いてかないで！」

「だあほ！ とつとつついてこい！」

後方から光が迫ってくる。早い。

「全機、スラスターの出力全力で跳べ！ 捕まったら終わりだぞ！」

「もういっぱいはいです！」

「も、もうだめだあ！ 追いつかれる！」

「あきらめんじゃねえ！ うおお！？」

突然、機体が前のめりに倒れた。

「バ、バランサーが狂ったああ！？ こんなときに！！！」

必死に機体を立て直そうとするが上手くいかない。もともと俺の機体は地上用にチューニングされたものを応急改修したもの。この

無重力の海で溺れてしまっている。

「小隊長！」

「今、助けます！」

「バカ！ 戻るんじゃない！ 全力後退！ 命令だ！」

機体を反転させようとした部下どもを怒鳴る。今、反転したらもう逃げきれない。

「行けえ！！ 生き残って戦い続ける！ 俺の手下なら戦って死ね

！」

「しょ、小隊長お……」

「いくぞ、コンドウ！！ 中尉の、中尉の命令だ！」

コンドウとキムラの機体が更に加速して離れていく。もう機体を動かすのはあきらめた。どうせ間に合わない。

ヘルメットを取ってポシエットから煙草を取り出す。本来ならあり得ないが、これから死ぬんだから少しくらいいいだろう。

「ちくしょう、いい人生だったなあ、このやろっ」

最後の煙草を吹かしながら俺は光の奔流に飲まれた。

ソロモンにて（後書き）

物語の進行上、オリキャラがぽんぽんでますが、気にしないでください

緑の巨人、立つ

「く……なんだあ、地獄つてのは真つ暗闇だな」

気がつくくと暗闇の中に俺はいた。体が重い……重い？

「重力がある？ オイオイ、ソロモンにや重力ブロックはねえぞ」

そういえばこの暗闇も妙な圧迫感がある。むしろよく知っているような感じた。手を伸ばすと馴染んだ手応え。うん、こりやザクのコクピットだな。

「なんだよ、生き残っちまったのか」

システムを再起動させる。モニターに灯が入り自己診断プログラムが自動で起動する。

システムオールグリーン。推進剤残量85%、マシンガン125発、予備弾倉2、ヒートホーク、クラツカー、固定兵装その他異常なし。核融合炉正常。

幸いなことに機体に異常はない。カメラを起動させると、外の映像が入ってくる。

「コロニーの中？ いや、これは……地球か？」

空を見上げると抜けるような蒼。コロニーのように反対側の地上が見えることはない。

「現在地は……くそ、GPSがイかれてやがるのか、なに？」

システムエラー。現在地の測定に失敗。いや、それより集音マイクがとらえた音は……砲声？

「なんだありや？ 馬鹿でかい城壁？ それとモビルスーツ……じやなさそうだな」

カメラを音のした方に向けたら凄まじい高さの城壁があった。城門らしき所が大きく破壊されていてそこに巨人が群がっている。城門に備えられた旧式な大砲に兵士のような連中がいて巨人を狙っていた。

「おいおい、嘘だろ」

俺はそれを見た瞬間に機体を城門を向け、跳躍させた。

巨人が兵士をつかみ上げ、口に放り込んだ。

人を食っていやがった。

巨人対緑の巨人

「うおおりゃー!!」

ヒートホークを振りかぶり群がる巨人の一体を脳天から竹割りにしてやった。手応えはかるい。この巨人は見た目どおり装甲などないのだろう。

「よくわからねえが、少なくとも人間を食う奴はダチにやなれそうにねえな!!」

返す刃で別の巨人の首をはねとばす。巨人には種類があるよう为先ほど倒した15〜6mのもの、その半分程度の7〜8m、そして足元に群がってきている3〜4mのもの。

「がああああ!! ウザい上にきもいんだよ、てめえら!!」

足元に群がってきた小物を蹴り散らし、踏みつぶす。ザクの鋼鉄の足に蹴られて小物は肉塊と化した。

巨人はどれも醜悪だ。人間のようだが生殖器はなく、口が頬まで裂け、むき出しの歯が更に嫌悪を誘う。

「ん、だから人を食うじゃねえ!!」

またしても兵士をつまみ上げ飲み込もうとしていた巨人の首を後ろから掴んで握りつぶす。その手からこぼれ落ちた兵士を地面に落ちる前に手のひらで受け止めてやる。

「おい、無事か! どうなってんだこりゃ!!」

拡声器で助けた兵士に問いかける。だが返ってきた言葉が分からない。

「言葉が通じない？ どの僻地なんだよ、ここは」

仕方ないので兵士を城門の上の砲台に戻してやった。他の兵士がすぐに駆けよった。こちらに向けて何かを言ってくる。

「わりい、なに言ってるかさっぱりわかんねえや。でも、ここは任せろ」

ザクの右手で胸を叩いて言っただけだった。すると兵士等も一斉に右手を胸にやり、姿勢を正した。

「なんだ、あんたらの敬礼か？ それなりの組織はあるみたいだな」

それから暴れまわって城門付近にいる巨人を殲滅した。不思議なことに巨人は倒れると煙のように消えてしまう。中にはどういう仕組みか体が再生してまた襲いかかってきたが、滅多切りにするともう起きあがってこなかった。

「あらかた片付いたな、あ、なんだよ？」

また城門の兵士たちが何かを叫んでいた。こちらに言葉が通じないと分かると今度は全員で城壁の中を指差した。

「まだ中にこいつらがいるってことか？」

城門に開いた穴は高さが10m程度、横幅は問題なさそうだが敵

しい。

「だが、それをやるのが俺だよな」

助走距離を取り、機体を低く屈ませバーニアを吹かして城門を一気に突破した。

その先で見たのはさらなる地獄絵図だった。

緑の巨人と少女の出会い

屍が累々と転がっている。上半身だけ、下半身だけ、右腕だけ、頭だけ、胴体だけ。

「ひでえ、なんだよ、こりゃあよ」

それらは巨人の食い残し。戦った兵士たちの亡骸だった。

「よし、とりあえず巨人どもは全部ぶったぎる。それから言葉がわかる奴を探して話を聞く」

方針を決めたらあとは行動するだけだ。

手当たり次第に巨人どもを狩る。斬る、叩き潰す、踏みつぶす。暴れに暴れ回った。

巨人は体温が異常に高いらしく高熱を放っていた。それをセンサーに登録してレーダー上に表示して効率よく巨人を狩っていく。

「おお、こいつらすげえな」

時折、兵士が空を飛び両手に構えた剣で巨人のうなじの肉を削ぎ取っていく。どうやらうなじの一部分が弱点らしい。

その兵士等は最初こそ、こちらを警戒していたが敵意なしと判断したのか空を舞って次の巨人に襲いかかっていく。

「しかし、楽に倒せるが切りがねえな。穴をふさぐしかねえんだろうけど、おお！いいものあるの忘れてたぜ！」

腰からクラッカーとは別の特殊手榴弾を取り出す。コロニーで空

気漏れが発生した場合に使用する硬化テクタイトを充填した試作兵器だ。通称はトリモチ弾。

「強度はあまり期待できねえが、時間稼ぎにやなるだろ」

穴に向かってトリモチ弾を投擲。時限信管によってちょうど通路の途中で爆発。通路いっぱいには粘性の硬化テクタイトが広がり、すぐさま空気と反応して硬化を始める。

「ナイスボールってかあ！ それじゃ掃除と行きますか」

巨人の増援を阻止した。次は入り込んだ巨人を処理するだけだ。

「あん？ 仲間割れか？」

巨人相手に無双していると巨人同士で殺し合っているのを見つけた。片方の巨人が強いらしく圧倒的な勢いで片づけるとすぐさま次の巨人に襲いかかっていく。

「ま、人を襲わずに仲間を襲ってんなら後回しでいいだろ。ん、なんだ？」

俺のことを味方だと判断したのか兵士が建物の屋根に登りなにかを叫び、指を指した。指を指す方向には巨人に群がられたでかい建物があった。

「生存者が立てこもっているのか？ 助けてくれってことか、よし」

その兵士に向け、胸を叩いてやる。やはりここの敬礼なのか兵士も胸に拳をやって返してくる。これだけが唯一の意志疎通だ。

「待つてるよ！ 今、助けてやる！」

襲ってくる巨人を兵士等と共に蹴散らしつつ、建物に向かう。建物につくと何体かが俺に向かってきやがった。手当たり次第に切りつけ、排除する。建物にたかっている巨人をひっぺがして地面にころがし、首を踏みつぶす。53トンの重量は伊達じゃない。

「あらかた片付いたな」

物から巨人を一掃した。もしかしたら建物内部に小型の巨人が侵入しているかもしれないが、それは兵士たちになんとかしてもらえないしかない。

一緒にきた兵士たちが建物に突入してしばらくすると屋上に兵士たちが出てきた。よく見ると全員若い。少年少女と言ってもいいくらいだ。

「おい、お前ら、俺の言葉がわかるか？」

拡声器で話しかけると一緒に行動してきた兵士以外がぎよつとした。リーダーらしき兵士がなにかを叫んできたがやはり言葉がわからない。

「だああああ！ 英語が通じねえってお前らなに人だ！」

見た目は白人っぽいのが多いのに聞いたことのない言葉を話しかる。

「こちとら共通語と日本語しかわかんねえんだよ！ おい、誰か日本語はわかんねえのか？ わかんねえよなあ！ くっそう……お！」

やけくそで日本語で喚いたら反応したのが一人いたよ。黒髪で顔立ちも東洋人っぽい少女。

「おい！ その黒髪でマフラー巻いた美少女！ 言葉わかるのか？」

『……少し、分かる』

それが俺とミカサ＝アツカーマンの出会いだった。

リカルド＝トートの場合（前書き）

お待たせしました。多少、読みやすくなった、かな？

リカルド＝トートの場合

私の名はリカルド＝トート。トロスト区駐屯兵团、城門第2砲台の砲台長をつとめている。

5年前のシガンシナ区、ウォール＝マリアが陥落して最前線となった場所だ。当初こそ超大型巨人が来るのではないかと緊張した日々を過ごしていたが、2年も経つとそれは薄らいでくる。

「砲台長、1番から5番までの各砲座、点検整備に異常ありません」
「ご苦労、いつも通り即応要員を残して逐次休憩してくれ」
「了解しました」

いつも通りの日常。なにもない日々。うつかりすると気が抜けてしまう。

そう、そんなときだった。

「うわ!!」

突如として熱風が吹いた。目も開けられない。

「いったい、なにが？」

顔かばい、なんとか目を開けると

「壁？」

目の前に真っ赤な壁があった。熱風はそれからきている。

「きよ、巨人だああああ！」

「信号弾上げ！各砲座、撃てえええ！」

目の前に5年前の超大型巨人がいた。部下の悲鳴でとっさに指示はできた！？

「よけるおおお！！！」

超大型巨人が足を振り上げた。ウォール＝マリアの城門を破壊したときのように門を破るつもりか！

「う……各砲座、状況報告！！！」

轟音が轟いて固く閉ざされていた城門は吹き飛んだ。幸い、体は無事でまだ戦える。

「だ、第3砲台が城壁ごと崩落しましたあ！」

「3番砲も同じく！」

「1番砲、全員無事です！」

「2、4番砲、砲が台座から脱落！復旧不能！」

「5番砲、砲弾がこぼれました！再装填中！」

被害は甚大だ。一段下の第3砲台は全滅。第2砲台は2、3、4番砲が使用不能。

「1番砲！目標、前方のデカ物！とにかくぶちかませえええ！！！」

怒りのままに号令を下し、唯一射撃可能だった1番砲が火を噴い

た。もつとも超大型巨人にちっぽけな溜弾が効くかは分からないが、今、できることをやるしかない。

案の定、至近距離で命中したのにも関わらずまったく効いていない。ちくしょうどうすれば。

「次弾装填急げ！」

部下が装薬と砲弾を込める。

「ほ、砲台長！上を！」

「なに？」

上を見上げると超大型巨人が右手を大きく引いていた。

「そ、総員、一時待避！！奴は城壁の固定砲をなぎ払うつもりだぞ！」

ただちに城壁の中に待避する。部下が飛び込んだのを確認して私も駆け込んだところで、上から破壊された固定砲やレール、砲弾が雨のように降ってきた。

「野郎！」

こいつには知性でもあるのか？城壁の弱点である城門を狙って破壊したり、巨人を迎撃できる固定砲をなぎ払うなんて普通じゃない。

「1番砲、装填よし！」

「5番砲、装填よし！」

「よおし！各砲座、う……」

て、と続けられなかった。超大型巨人の体から再び熱気と煙が吹き出してきたからだ。

「煙幕のつもりか？構うな、撃てえええ！」

火を噴く2門の砲。同時に上からも砲声が聞こえた。第1砲台は無事だったらしい。

「ただちに、装填！ありったけぶち込んでやれ！すぐに増援もくる、ここでしとめる……ぞ？」

煙がはれた。私は呆然とする。たった今まで目の前にそびえ立っていた肉の壁がこつ然と姿を消したのだ。

「に、げた？」

「砲台長！あれを！」

部下が指差す方向にいたのは巨人の大群。15m級から3m級まで軽く100体以上がぼつかりと開いたトロスト区の城門を目指して群がってきやがった。

「各砲座、弾種変更！ぶどう弾詰め！！避難が完了するまで奴らを足止めする！」

「しかし、砲台長！ここでは15m級の手が届く可能性があります。もし、奇行種でも来たら……」

そつだ。この第2、第3砲台は巨人を効率よく迎撃するために低い位置に配置されている。ギリギリまで迎撃したのは壁上の固定砲班に合流することになっている。

「ここを死に場所と心得ろ！壁上の固定砲は全滅、第1砲台が健在だとしても火力が足りん！増援がくるまで支えられるのは私たちだけだ！」

「りよ、了解い！1番砲、装填よし！」

「5番砲、装填よし！」

「各個に撃て！！続けて装填！」

2門の砲がいくつもの砲弾を吐き出す。巨人に命中するもの奴らはひるまない。頭や足を吹き飛ばして一時的に動きを止めるが、1、2分もすると吹き飛ばされた所を再生して進撃を続ける。

何体もの巨人が城門だった穴を通り、トロスト区の中に入っていく。住民の避難は間に合うのか。

「ああああアアあああつ！！！」

下から断末魔の悲鳴が聞こえてきた。第3砲台が崩落したときに一緒に地面に落ちて運悪く生き残った兵士が巨人につかみあげられていた。

「砲台長！」

「諦めろ、助からん」

私だつて助きたい。しかし、もう助からない。下に落ちたときに死んでいた方がよかったかもしれない。生きてまま喰われるよりはましだ。

巨人が口を閉じて鮮血がほとばしる。悲鳴はとつにとぎれていた。

「砲台長、まだ生存者がいます！」

「……溜弾用意」

「砲台長！？！」

私の命令に部下は戸惑う。

「もう彼らを助けることはできん。仮に助けにいったとして巨人の胃袋に入るのが一人増えるだけだ。せめて生きたまま喰われるより一瞬で楽にしてやった方が彼らのためだ」

「し、しかし、砲台長……」

「やれ、責任は私が取る」

「りよ、了解。溜弾、装填します」

部下が装填作業を行う。その間にも第3砲台の兵士たちは巨人に喰われていく。幸いに喰うのに夢中で巨人は動きを止めている。溜弾でも確実にしとめられる。

「許せ」

ほんのわずかに目を閉じ、兵士らに向かってわびた時、聞き慣れない音が私の耳朵を打った。

「なんだ？」

音の下方を見て私は驚いた。見たこともない緑色の巨人が凄まじい勢いでこちらに向かってきていた。その手には巨大な斧を持ち、赤い一つ目を光らせ、背中から火を噴きながら飛んでいた。

「ほ、砲台長！ なんなんですか、あれ！！」

「私に聞くな！ 新種の巨人ってことでいい！ 20mはあるな！
！ くそ、砲塔旋回！ 当てる！」

とにかく迎撃せねば。効くかどうか、いや、それ以前に当たるか

どうか分からなかったが砲を向けさせた。しかし、それは無駄になる。

「なん、だと！」

私はあり得ない光景を見た。

緑の巨人は城門前に降り立つと目の前にいた15m級を頭から手にした斧で叩ききつたのだ。

そのまま当たるを幸いに斧を振るって巨人の首をはね飛ばし、小型の巨人を蹴り散らし、踏みつぶした。そして、今、まさに兵士を飲み込もうとしていた巨人の首を掴み、そのまま握りつぶした。さらに巨人の手からこぼれ落ちた兵士を地面に激突する前に巨大な手で受け止めた。

「私は夢でも見ているのか」

巨人が巨人を殺す。今まで見たことも聞いたこともない。加えてこの巨人は明らかに私たちを助けようとしている。今も手に乗せた兵士に向かって言葉を発し……言葉を！？

「おい、今、あの巨人が話したように聞こえたんだが、気のせいだよな？」

「いえ、俺も聞こえました、砲台長。言葉は分かりませんでした」

そう、話した言葉は聞いたことのない言葉だったが意味のあることを話していたようだった。

緑の巨人は助けた兵士を私のいる城壁まで運び、丁寧に下ろした。

「おい！！ お前は何者だ！ 言葉がわかるのか！！」

私は思わず緑の巨人に話しかけていた。もし、言葉が通じて私たちの味方をしてくれるとしたらこれほど心強い援軍はない。

だが、緑の巨人は首を左右に振った。言葉は通じないらしい。しかし、緑の巨人はまた私を驚かせた。なんと胸に拳を持ってきてドーンと叩いたのだ。

「砲台長！ 巨人が……我々の敬礼を！！」

「ああ……総員、敬礼！！」

なぜか、私は敬礼を命じていた。そうしたいと思った。

それから緑の巨人は城壁に集まってきていた巨人を襲いまくった。弱点を知らないようで時々、しとめ損なった巨人が襲いかかるもまるで子供を相手にするようにあしらい、倒していった。

「つ、強すぎる……」

城門周辺の巨人は全滅していた。緑の巨人はあたりを見回して他に獲物がいないか探しているようだった。

「おい！ 緑の巨人よ！！ もしも、人類の味方なら城内に巨人が進入している！！ 仲間たちが戦ってるんだ！ 助けてやってくれ！」

「砲台長！ 正気ですか！ あんな奴を中に入れるなんて！？」

「ああ、私も自分が信じられん。だが、あの緑の巨人は私たちの味方だったら素晴らしいと思わないか？」

「それは、そうですが。でも、言葉は通じないようです
「の、ようだな」

緑の巨人は私の呼びかけを聞いて振り向いたが、やはり言葉は通じないようだ。だったら

「こつちだ！ この中だ！！ 頼む！ 女房と娘がまだ残ってるんだ！」

緑の巨人の注意を引き、叫びながら城壁の中を指さした。他の兵士も私と同じく口々に叫びながら城壁の中を指さす。

すると巨人は城門から少し距離を取り、身を屈めるとまた背中から火を噴いて城門に飛び込んでいった。

「ほ、本当に入った。大丈夫でしょうか」

「わからん。少なくとも人間は殺さない、巨人は殺す。それだけでも大助かりだ。それより新手だ」

緑の巨人が一掃したとはいえ、巨人は無数にいる。新たな巨人が城門に向かってきていた。

「私たちもやれることをやるぞ！！ 撃ち方用意！」

緑の巨人が仲間たちを助けてくれる。だったら私は私の責務を果たすだけだ。

「撃てえええ！！」

リカルド＝トートの場合（後書き）

次をミカサ視点にするか、それとも途中まで一緒の名も無き兵士にするか……あーエレンゲリオンの扱いも忘れてた……ザクとかち合っ
つてしまう……どうしよう

ウェスカーIIポートマンの場合(前書き)

できました。

5000アクセス

900ユニーク

お気に入り登録、評価、感想ありがとうございます。
めっちゃ励みになります。

ウェスカーIIポートマンの場合

「うおおおっ!!」

第104期訓練兵団、17班、班長ウェスカーIIポートマン。

今、巨人の手を必死に逃れた俺です。もう半泣きだ。いつぞ、泣きたい!

「ウェスカー! もう無理だ! 撤退しよう!!」

もう一人泣きそう、いや、むしろ泣きながら機動しているのはレオンIIアルバカーキ。唯一の残った17班の班員。

ほかの班員はどうしたって? とつくの昔に巨人に食われちゃった。

8人いた17班も俺とレオンの2人だけに、いや、あと1人。

「こんなときにミカサがいてくれたらなあっとおおお!!」

あぶねえ、あぶねえ。後衛に入れられたら104期の首席、ミカサIIアツカーマンを思い出していたら危うく巨人に捕まれるところだった。

「ないものねだりしても仕方ないか、撤退の鐘はまだかよ」

「ウェスカー! もう無理!! もう死ぬって! 逃げようってば!!」

叫ぶわりには巨人の攻撃を紙一重で避けているレオン。

「逃げるったってこの包囲を突破できる自信あるのかよおっ」とと

！」

周りは巨人だらけ。15mから3mまでバーゲンセールだ。元々、中衛だった俺たちの班は前衛の先輩方が全滅したおかげでなし崩しの前線へあがっていた。いつの間にか城門まで来てしまつて団体さんを相手することになつちまつた。

「ガスも残りすくねえ……一度、補給に帰りたいが……こりゃ死んだかな」

「不吉なこと言つんじゃねえ！！ そいやああ！！」

レオンがつっこみつつ、12m級の延髓を削り取つた。焼け石に水。隙を見て反撃するものの逃げるのが精一杯だ。

「そろそろやばいかなつて！ なんだありゃ？」

城門からまた新手の巨人が入ってきた。しかも、今まで見たことのない緑色の巨人だった。そいつは背中から火を噴き、飛び込んでくるとゆっくりと立ち上がった。

「でけえ、20mはあるんじゃないか？ おい、レオン。俺たち死んだな！！」

「激しく同意するぜ、ウエスカー。ここにきて新種様に会えるとは感激だぜつてえええ！！」

絶望のあまり自虐的な軽口を叩きつつも足は止めない。足を止めたら食われる。

新しい巨人にどう対処するべきかな、とりあえずやってみるかな。

「おりよ？ こりゃいいな、おい。あいつ、仲間を殺し始めたぞ」

緑の巨人は手に持った巨大な斧をふるうと手近にいた15m級をたたき殺した。

それからばっさばっさと巨人を駆逐していく。圧倒的に強いじゃねえか、なんだこいつ。

明らかに俺たちを認識しているにも関わらず一切、襲ってこない。むしろ巨人を狩る方が重要みたいだ。

「レオン、ひよっとしたら生き残れるかもな」

「俺もそんな気がしてきた。頑張れ！！ 緑の巨人！」

緑の巨人はあつという間に城門付近にいた巨人を殲滅した。ちなみに、俺たちは好機の時だけ巨人に攻撃し、ほとんど逃げ回っていた。我ながらヘタレだな。

「はは、ほんとに全滅させちゃった。いや、俺たちツイてるな」

「た、助かったあ……」

胸をなで下ろしていると緑の巨人がなら腰のあたりをまさぐりはじめた。そして丸い玉を取り出すと城門にあいた穴に向けて投げた。

溜弾が爆発するような音がして玉が爆発し、透明な液体が飛び散った。液体はちょうど通りかかった巨人を巻き込むとみるみるうちに白くなり巻き込まれた巨人は固まって動けなくなった。

「すげえ！！ あの巨人、穴を塞ぎやがった！」

「ウエスカー、今のうちに本部に戻ろう。そろそろガスがやばい」

「よし、そうしよう」

本部に向かう。ガスが無くなったら機動できない。機動できない

ってことは巨人のエサになるってことだ。

「しかし、本部の補給班はどうしたんだ！ ぜんぜん、補給にこないじゃねえか！！ あとで吊す！」

「もしかして本部が巨人に？」

「ありえるな」

巨人は人が多くいるところに集まる習性がある。本部には補給班が残っていたから襲われることはありえる。

「あらら、案の定だよ」

本部が見えてくるとたくさんの巨人が本部にたかり、腕をつつこんで探っていた。

「あゝあ、せつかく助かったと思ったのによう」

レオンがぼやいたところで、カーン、カーンと撤退の鐘が聞こえた。ようやくか。

「レオン、壁登るのにガス足りるか？」

「たぶん……足りねえ。壁を登れる量はギリギリ残ってるが、たぶん、壁に着くまでに使い切る。そっちは？」

「似たようなもんだな。つーことは、だ。俺たちが生き残るには本部の補給所まで行って、ガスを補給しなきゃならんわけだ」

「だ、な。で、どうする？ 斬り込むか？」

レオンが剣を本部へ向ける。

「冗談。俺ら2人で斬り込んだところで巨人に食われに行くような

もんだぜ」

「だよなーでも、策があるんだろ？」

「もちろん、それもとびっきりの奴がな」

そういつて後ろを振り向く。なんだかんだで俺たちの後ろをついてきた緑の巨人がいた。

この緑の巨人。人が襲われていると巨人を狩るのより優先して助けてくれるらしく、それを利用して巨人に自ら突っ込むことでここまで誘導してきた。

近くの屋根に飛び移り、緑の巨人に向かって叫ぶ。

「おい、あんた！！ 俺の声が聞こえるかい！！」

15m級の首を握りつぶしていた緑の巨人は振り返った。しかし、分からないともいうように頭に左右に振る。

言葉は通じないか。でも、意志があるなら十分。

「向こうだ！ 向こうを向いてくれ！ 巨人がたかっている建物が見えるだろう！ あれを何とかしてくれ！」

叫びながら本部の方を指さすと緑の巨人は本部の方を向いてくれた。そしてまるでわかったというように頭を縦に振ると右手で胸を叩いた。

「……驚いたな、俺たちの敬礼を理解しているのか？ おい、レオン」

「ああ、わかつてる」

緑の巨人に向かって敬礼を返す。

それから緑の巨人は早かった。まず、俺たちの周りの巨人を排除

すると、次いで本部までの道を掃除、本部にたどり着くとたかっている巨人を引っ剥がして地面に叩きつける。

「行くぞ、レオン！！　しっかり着いてこいよ！」

「合点承知！！」

緑の巨人が進撃するのに合わせ本部までたどり着いた。道中は緑の巨人のおかげで楽だったが、さすがに本部にたかっていた巨人は数が多かった。

圧倒的な強さの緑の巨人も少々手に余っているようだった。だが、ここまできたら飛び込むだけだ。

「ひゃっふおおおーっ！」

「ちよ、ガス切れた！！」

助けて！！　ウエスカー！！

本部の窓にアンカーを打ち込んで、いざ飛び出す段になってガス切れを起こしマジ泣きをするレオン。その首根っこを掴み、ガスを最大出力で噴射して窓に飛び込んだ。

「いてて、このボケ！　あのタイミングでガスを切らすんじゃないよ！」

「うっ、ごめん。まさか切れるとは思ってなかったわ」

「ごめん、ごめん。まさか切れるとは思ってなかったわ」

まったく俺のガスに余裕がなけりやおいてったところだ。飛び込んだのは本部の3階。巨人に探られたのか中は荒れ放題だった。

「ウエスカーにレオンじゃないか！！　よかった、生きてたのか！」

「おう、ライナーじゃねえか。そっちも生きてて何よりだ。ひよつとしておまえ等もガス切れか？」

「ああ、でも補給所の巨人を制圧してボンベを確保した。すぐに撤退する、下にきてくれ」

「わかった。助かるぜ」

声をかけてきたのは同期のライナー。ライナーについて2階に降りると仲間が大勢いて立体機動装置にガスを補給していた。その中で見知った顔を見つける。

「ミカサ！ 無事だったか」

「ウエスカー！！ あ、レオンも生きてたんだ」

「俺は生きてちやいけなのかよお！！」

「うっさい、黙れ」

嘆いてうるさいレオンに空のボンベをたたきつけ黙らせる。

「しかし、なんでミカサがここにいるんだ？ 後衛はとっくに撤退しただろう？ ま、わかるけどさ」

「中衛を援護するために戻ってきた」

「エレンを守りにきたんだろう？ ったくエレンめ、果報者め」

「ち、違うっ！」

ミカサは否定するが俺には分かっている。というか同期連中でミカサがエレンを異常なまでに大切にしていることを知らない奴はいないんじゃないか。

「それでエレンは？ もう撤退したのか？」

「……」

ミカサがいつも通り表情に乏しいながらも苦しそうに顔を歪めた。

「まさか……」

「ごめん！ ウェスカー。エレンは僕のせいで……」

「アルミン」

アルミン＝アルレルト。同期内で一番体力がなく、一番頭が良い。そしてエレンと同じ班だった。

「ごめん、本当にごめんなさい！」

「アルミン、事情は分からないが今は、悔やむところじゃない。生き残ってから蔑んでやるから今は、生きること考えればいい」

「ウェスカー……」

エレンは死んだ。それ以上もそれ以下もない。だったら生きている俺たちができるのは死んだ連中の分まで生きてやるだけだ。

「全員、ガスは補給したな！！ 一斉に出るぞ！」

補給が終わった者からどんどん飛び出していく。幸いに巨人はほとんどいない。

「ウェスカー、俺たちも行こう」

「おう、だけどちょっと寄り道してく。来なくていいぞ」

「ちよ、どこいくんだよ!？」

レオンを置いて本部の屋上に登る。本部の周りにはもう巨人がいなくなっていた。緑の巨人だけが立っている。

「おい、ウェスカー!!! どこいくんだ……よ」

「助けてもらったんだ、礼くらいな。おーい!!」

声を張り上げ、手招きをする。たぶん、分かるはずだ。

緑の巨人は狩る相手もいなくなったからか、ゆっくりと近づいてきた。

「ウエスカー！？ なにしてるの！ 逃げないと！！」

「緑の巨人？ また新種？」

レオンに続いてアルミンやミカサ、他にも数人が屋上にあがってきた。みんなびびってるなあ、当たり前だよな。

「大丈夫だ、アルミン、ミカサ。こいつは人の意志がわかる。襲ってこない」

「襲ってこない？ この巨人も？」

「この巨人も？ ということだ、アルミン？」

「えっとね、」

アルミンが説明しようとしたところにまた緑の巨人が話しかけてきた。やはり言葉は分からない。

「……なあ、ウエスカー。今、この巨人しゃべらなかつたか？」

一緒に上がってきたライナーが啞然としている。わかるわあ、俺もそうだったもん。

「ああ、この緑の巨人は他の巨人と違うみたいだ。言葉は分からないが、意志は通じるみたいだ」

「うそだろ……あの巨人みたいなのがもう一体いたなんて……」

「あの巨人？ なあ、さつきからなんのことだ？」

「あ、ああ。実はな」

ライナーが説明しようとしたときにまた緑の巨人が言葉を発した。

「だからわかんないんだってば！」

『少し、わかる』

「ミカサさん！？ 今、なんて言ったの？」

ミカサが聞いたこともない言葉を発していた。

「ミカサ、もしかして緑の巨人の言葉がわかるのか？」

「少しだけわかる。お母さんが教えてくれた、古い言葉」

「マジかよ……緑の巨人はなんて言ってるんだ？」

「言葉はわかるか？ って言ってる。向こうも私たちの言葉は分からないみたい」

「すげえ、こりゃあ人類にとって頼もしい味方ができたかもしれない。」

「周りが緑の巨人が話すのに驚いてるともつと驚くべきことが起こった。」

「緑の巨人が屋上のギリギリまで近づいてきて、なんとその黒い胸が上下にひらいたのだ。」

「そして、その胸の中から……」

人間が降りてきた。

ウェスカーIIポートマンの場合（後書き）

次から主人公視点になります。

ここで募集ですが、これからも物語の進行上、ちょいちょいオリキヤラが出てきます。

作者の乏しい発想力では名前があまり思いつきません。

だいたい1話かぎりのちょい役になりますが、オリキヤラの名前を男女ともに募集します

メッセや感想からお願いします

トロスト区奪還作戦（前書き）

『は日本語といふことで』

トロスト区奪還作戦

「いたいた。まさか日本語が通じるとは思わなかったな。まあ、通じるなら何でもいい」

やっと言葉が通じた。それが日本語でもいい。あの美少女に通訳してもらえればいいんだ。

「このままじゃ、話しくいか。近くの巨人は……あの仲間殺しの奴と数匹、距離はあるな、よし」

機体を建物の屋上に近づかせてる。やっぱりビビってる。まあ、こいつら巨人と戦ってるから仕方ないか。

ヘルメットは、いらさないな。どのみちエアは無限にない。ここの空気が吸えないなら死ぬだけだ。こいつらが大丈夫なんだからたぶん、いけるだろ。

「念のためコイツだけは持って行くか」

収納スペースから拳銃を取り出し、ホルスターに納めてハッチを開ける。

昇降用のワイヤーで屋上に降り立つと兵士たちがめちゃくちゃ驚いている。

俺は鬼にでも見えるのか？

『俺の言葉がわかるんだな？』

唯一、反応した美少女に話しかける。

おい、警戒するのはわかるけど剣を向けてくるんじゃないやねえよ、外

野。

『わかる。お母さんの言葉。お母さん以外では初めて聞いた』

『そうか。状況的に余裕はなさそうだから要点のみ話そう。俺はジオン公国軍、ソロモン要塞防衛隊所属のコウスケ。フルカワ中尉だ。あんたは？』

『ミカサ。アツカーマン。第104期訓練兵団、17班。貴方は人間なの？』

ああ、なるほど。こいつらザクから降りてきた俺を巨人の仲間だと疑ってるのか。

『人間だ。最低でも人を喰うような趣味は持ち合わせてないな。だから剣を下げてもらえないか』

俺が答えるとミカサは剣を構えていた兵士たちに違う言葉でなにかを話した。たぶん、害意がないことを伝えてくれたんだと思う。兵士たちは疑いの目を向けて来るも剣は下げてくれた。

『ありがとう。いくつか質問したい、答えられるものでいいから答えしてくれ』

『わかった。でも、少しゆっくり話してほしい。全部聞き取れない』

どうやら日本語はメジャーじゃないらしい。

『悪かったな。まず、ここはどこだ？』

『どこって、トロスト区。この建物はトロスト区の兵団本部』

ミカサと名乗った少女は場所を聞いた俺を奇妙なものを見るような目で見た。当たり前のことをなぜ聞く？ そんな目だな。

『トロスト区？ ここは地球のどの辺なんだ？』

『地球？ 分からない。なんのこと？』

『は？ 地球がわからない？』

なんだかすげー嫌な予感がしてきたぞ。

『よし、その話はひとまず置いておこう。次だ、あの巨人はおまえらの敵か？』

『敵。貴方はやつらの仲間なの？』

おお、こええ。凄まじい殺気だな。冗談でもはいといったら即斬られそうだな、おい。

『さつきも言ったろ、人間を喰う趣味はない。そういうことで俺としては、そっちに協力する用意がある』

『協力？』

『ああ、俺はこのザクのパイロットだ。あのくそつたれどもを蹴散らすのには十分すぎる戦力だぜ』

『ザク？ パイロット？ これは巨人ではないの？』

『違う。ザクは兵器。パイロットは操縦者だ。ザクはお前らのその腰についている奴と同じだとおもっていい。パイロット、つまり俺はお前みたいなのを使うものだ』

『立体機動装置と同じ？ パイロットは使用者……理解した』

うん、頭の回転は速いみたいだな。

『じゃあ、次の質問だ。お前らはこれからどうするんだ？』

『ウォール＝シーナ、この先の壁まで撤退する。私たちの任務は住

民の避難が済むまでの時間稼ぎだから任務は達成した』

『そうか……そこに俺もついて行ってかまわないか？』

『なぜ？』

ミカサが疑うような目をした。

『協力する用意があるといったる？　ここで暴れるのもいいが効率よくいくなら作戦が必要だ。お前らの指揮官に会わせてくれ』

『わかった。少し相談したいから待つて』

『早めに頼む。いまのところ奴らは遠いが、また来るぞ』

ミカサは頷くと仲間の元に戻っていった。

とにかく協力するにしても指揮官に会わなければならない。この兵士の反応をみる限りたぶん、城壁に近づいたら砲弾が飛んでくるだろう。

61式の155mすら余裕で跳ね返すザクの装甲なら蚊に刺されたほどにも効かないが、誤解はさけない。

それに状況的に友軍どころか連邦軍すらいないようだ。補給は全く望めない。核融合炉に異常はないから動力については当分心配ない。

問題は弾薬と推進材、それになにより大事なのは俺自身の飯と寝床だ。

弾薬は節約できる。ヒートホークと徒手空拳、レーザートーチを使えば巨人なんて楽勝だろう。

だが、推進材はどうにもならない。この壁を越えるのに相当な量を消費するだろうからよほど節約しなければならない。

あとはなんとと言っても食いだ。いくらかの非常食と水、コンパimentに収納した私物の食料はあるがいつまでももたない。とりあえずは彼女らの軍に協力して食料の融通をしてもらわなければ、飢える。

『待たせました。私たちでは判断できかねるので上官に相談します』
『ま、そうだろうな。で、俺はこのへんで巨人を狩ってればいいか？
いきなり近づいたら撃たれそうだな』

『はい。話をまとめたら赤い信号弾を撃つので城壁まで近づいてください』

『わかった。城壁の近くまで俺が道を造ろう。その方が味方っていうアピールになるからな、ん？ あれは』

話がまとまってコクピットに戻ろうとすると俺たちがいる建物から少し離れたところで、あの仲間殺しの巨人が両腕を失い複数の巨人に押さえ込まれていた。

『共喰いしてんのか。なあ……ミカサ、だったっけ？ あいつらって共喰いするもんなのか？』

『今まで聞いたことがない。あの巨人は特殊。あなたと同じで人も襲わない』 『だから俺は巨人じゃねえっての。じゃ、助けるか？
巨人を倒してくれるなら役に立つだろう？』

戦力は少しでも多い方がいい。邪魔になったら斬ればいい話だ。
とりあえずザクに乗り込もうとすると喰われる一方だった両腕がない巨人が彷徨した。まとわりつく巨人を振り払い、目の前を通りかかった巨人の首筋に食らいつくと振り回して他の巨人にたたきつけた。

巨人が起きあがる前に首筋を踏み潰してとどめを刺す。

『助けるまでもなかったな、が、さすがに限界か？』

両腕のない巨人はひざを突き前のめりに倒れた。他の巨人と同じように消えるだろう。

『ん、なんだありゃ？　なあ、ミカサ……つてどこいくんだ？』

消滅するかと思った巨人の首筋が盛り上がると人に形を取った。モビルスーツみたいに人が乗り込んでるのか？　でも、なんでミカサがそれを見た途端に屋上から飛び降りて駆け寄っていくんだろ
うか。

『あ、戻ってくる。おい、ミカサ、いったいどういこと……なん、
だ？』

おもわず言葉に詰まった。ミカサが連れて帰ってきた少年を抱きしめたまま大きな声で泣き始めた。金髪のひ弱そうな少年もミカサが連れて帰った少年の手を握り、なにがなんだ分からない顔をしている。

『なあ、おい。これはどういう状況だ？』

隣にいた大柄な兵士に話しかけるがやっぱり言葉は通じない。

誰か状況を説明してくれよ……

トロスト区奪還作戦（後書き）

ややこしい

トロスト区奪還作戦2

ミカサが泣きやんでから事情を聞くと巨人から出てきた少年はエレン・イエーガーといって巨人に喰われて戦死したと思われていた兵士らしい。

幼い頃に両親を失ったミカサはエレンの家で暮らしていたらしい。死んだと思っていた家族同然の幼なじみが事情は分からないが生きていた。まあ、我を忘れて泣くのも分かるな。

『しかし、家族が……』

ザクを駆り、巨人を蹴散らしながら思い出す。

開戦前、隕石の衝突で農業ブロックで働いていた親父とお袋は死んだ。連邦の監視省が見落としたせいだ。それもサイド3自治政府に圧力をかけるために演習を行っていた連邦艦隊が観測の妨害になったのが原因だった。

『ハルカは元気にいるかな』

サイド3に残してきた妹。唯一残った家族のことが気がかりだ。

戦争は遅かれ早かれ負けるだろう。国力の勝る連邦がモビルスーツまで配備し始めたらジオンに勝ち目はない。

激戦でベテランはすり減り、前線に送られてくるのは学徒動員の少年兵ばかりだった。

『こいつらも兵士なんだよな』

ミカサたちを護衛した後、合図の信号弾が上がるまで巨人を狩っていることにしたのだが、ちらほらと逃げ遅れの兵士がいた。

ほとんどがミカサたちと同じ少年少女でガスを無くして立ち往生しているところだった。

ミカサたちが撤退する前にボンベを用意してもらいそういった兵士を見つけては拾い上げてボンベを渡してやる。もらった兵士は怯えながらガスを補給して城壁に向かって撤退する。

『しかし、数が多いな』

倒しても倒しても巨人は一向に減らない。一体どれだけの巨人が侵入しているのか。

『なんだ！？ 城壁の内側から？』

突然、城壁の内側から砲声が響いた。

『いったい、なんだってなんだ！？』

巨人はまだ次の城壁を越えてない。内側で砲を撃つことはないはず……まさか！

『あのエレンとかいう奴がまた巨人化したのか、それで味方から攻撃を受けたと……ミカサが危ない！』

ミカサはエレンを大切にしている。エレンになにかあったら必ず守るはず。

すぐさま機体城壁に向かって跳躍させる。たちまち砲弾がいくつか飛んでくるが関係ない。

砲声が聞こえたあたりまで行き、スラスターを全部吹かして上昇する。さすがに高い。

『案の定かよ！ ちくしょう、なにやってんだか！！ 今行くぞ、ミカサああ！！』

城壁にいた兵士を死なない程度に蹴散らし、城壁から飛ぶ。

エレンともう一人の少年、アルミンとか言ってたか、その二人を背にして抜刀したミカサが立っていた。もうもうと土煙が上がっているのは砲撃を受けたからか。でも、周囲に弾痕はない。まさか砲弾を斬った？ いや、漫画じゃないんだからな！

『そんなことより、今はミカサの救出！』

ミカサ達は仲間であろう兵士達に囲まれ、壁際に追いつめられている。対面にある城壁には複数の兵士がいて、指揮官らしい兵士が片手を挙げていた。その少し後方に装填作業中の砲座が見える。

『させるか！』

地上につく手前でスラスターを噴射して勢いを殺す。本当なら全力で吹かしたいが、それだとミカサ達を焼き殺してしまう。

最小限の噴射で着地してザク自身も屈伸させ衝撃を吸収させる。それでも脚部にかかなりの負担がかかった。あとで整備班長にどやされるな。

『ミカサあああ！ 無事か！！』

『フルカワさん！』

『無事で良かった！ 状況がわからねえ、どうすりゃいい？』

『待つて！ 今、アルミンがみんなを説得するから』

ザクの足元を抜けてアルミンが前にでる。言葉は分からないが指揮官に向けてなにかを言っているらしい。

こいつらの巨人に対する恐怖は深いようだから説得なんて無理だろうなあ。勢いで飛んできたけど、こいつらにしてみればザクも巨人に見えるだろうし。

『お、誰か来たな。おい、ミカサ、あれは誰だ？』

片手を挙げていた指揮官の腕を増援を連れてきた初老の男が止めた。胸にいくつも勲章のようなものをつけて他の兵士より偉そうだ。

『ドット』ピクシス司令。トロスト区を含む南側領土の最高責任者』司令官閣下か。ようやく話の分わりそうな奴が出てきたな、とめてくれたってことは話し合いの余地ありってことだろ、なんて言ってるんだ？』

『私たちの話を聞きたいって。貴方にも降りてきてほしいと言ってる』

アルミンが色々と説明してくれたらしい。話が早くて助かることだ。どうなることかと思ったがなんとかかなりそうだな。

トロスト区奪還作戦3（前書き）

更新、遅くなりました。

スマホに変えたら打ちづらい

トロスト区奪還作戦3

『ジオン公国軍ソロモン要塞守備隊、コウスケⅡフルカワ中尉であります。お会いできて光栄です、閣下。と通訳できるかミカサ?』

城壁の上でピクシス司令にジオン公国式の敬礼をしつつ申告する。ノーマルスーツのままではなにかと思ったから収納しておいた制服に着替えた。見た目というのは大事だ。あとは言葉が通じればいいのだが、しかたない。

『大丈夫。少し訳せない言葉があるけど、通じると思う』

通訳として引っ張ってきた、というよりミカサ、エレン、アルミンも同席するように指示されたので一緒にいる。

『まあ、概略が伝わればいいよ、ゆっくり話すから頼む』

『いや、それには及ばんよ、アツカーマン訓練兵』

『え?』

今、渋くてダンディーな日本語が聞こえたけど、ミカサってこんなに低かったか?

『あー、久しぶりに話すんです。言葉は通じているかな、フルカワ中尉、アツカーマン訓練兵』

見た目通りの渋い声ですね、ピクシス司令。

『失礼しました、閣下。まさか閣下も日本語が話せるとは思ってい

なかったものですから』

『ほお、この言語は日本語と言う名前なのか。イヨ君は東洋の昔の言葉として言っただけな』

『ピクシス司令！ 母をご存じなのですか？』

ピクシス司令が日本語を話せたことに驚いたが、ミカサは別のことに驚いているようだ。

『うむ。イヨ君、つまり君のお母さんとは友人だね。君とも昔会ったことがあるよ。本当に惜しい人を亡くしたものだ』

しみじみと語るピクシス司令。 んー縁とは奇なるもの、なのか。

『じゃが、昔話はあとにしよう。フルカワ中尉、まずは礼を言わせてくれ』

ピクシス司令は俺に向かって頭を下げた。

『市民と将兵を救ってくれたと聞いている。援軍かたじけない』

『人として当然であります、閣下』

『そうか、少なくとも君が味方のようによかったわい。それにしても我ら以外で人類の生き残りがいるとはな。ジオン公国という国はどこにあるんだね？』

ピクシス司令は笑って喜んでいるが、どうしようか。

『閣下、今は時間がないと存じます。詳しい事情はこの事態が收拾してから説明したいと思いますが、ひとつ提案があります』

『ふむ、聞こつ』

ここからだな……

「自分は現在、指揮系統を失っています。原隊に復帰するまで閣下の傭兵として雇っていただきたい」

「雇用条件は？」

おう、即断で交渉に入ってくるとはいいね。

「まず、身分と衣食住の保証。次に武器弾薬燃料等の補給物資の提供、こちらについては調達できるものだけで構いません」

「ワシの権限で用意できるものはすべて用意しよう。して、見返りは？」

俺の出した条件を当然のごとく飲んだ。さすがは司令閣下だ。素晴らしい判断力を持っている。

なら、期待を裏切るわけには行かないな。

「この街を巨人どもから奪還して見せましょう」

トロスト区奪還作戦3（後書き）

ミカサの母については全くの捏造です
次回、ようやく戦闘になるはず……？

アルミン＝アルレルトの場合（前書き）

今さら、挿話

アルミン＝アルレルトの場合

今日はひどい1日だった。

訓練兵団の卒業した日。またあの悪夢が襲ってきた。

巨人の襲撃。

超大型巨人によって開閉扉が破壊され、巨人が侵入してきた。

駐屯兵団が出撃して住民の避難までの時間を稼ぐことになり、僕達も後衛として駆り出された。最も実戦経験豊富な調査兵団が壁外調査に行ってしまった後なのが痛かった。

戦闘は人類側の劣勢だった。いや、今日までにおいて人類が優勢だったことなどないと思う。

前衛の先遣班は瞬く間に全滅し、僕達は前へ出ざるを得なくなつた。

初陣で僕達は油断していた。まず、まていた奇行種にトーマスが食われた。それに逆上したエレンもまた片足を食われる重傷を負つた。

僕は動けなかった。

目の前でトーマスが喰われ、序列五位の精鋭で親友のエレンもあっさりとやつらにやられた。

死が目の前まで見えてきて恐怖で体が硬直した。残った仲間が巨人に飛びかかって行ったときも、そして全員が無惨に喰われ、握り潰されていくときもなにもできなかった。

屋根の上で膝をついて呆然と立っていた僕を巨人が見逃してくれるはずもなく、つまみ上げられ口に放り込まれた。ぬめぬめした巨人の舌を滑り落ちて行く時、ようやく僕は自分がこれから死ぬのだと思えた。

(死にたくない!)

感情が麻痺してしまった中でもとつさに僕は生きたいと思った。まだ閉じていない巨人の口から指す光が最後の希望に思えた。必死に手を伸ばす。もう喉近くまで落ち込んでいた僕の手は届くはずがない。それでも、僕は手を伸ばした。

そして、伸ばした僕の手を力強い誰かの手がしっかりと掴んでくれた。

「エレン!!」

屋根に叩きつけられたときに負ったのか、頭から血を流し、片足がないままのエレンが巨人の歯に手をかけ、僕の手を捕まえてくれた。

エレンは渾身の力で僕を外に投げ飛ばしてくれた。

「エレンも早く!!」

巨人が口を閉じようとしていた。エレンは全身で踏ん張るもとうてい抗えない。今度は僕がエレンに手を伸ばした。

「なあ……アルミン……お前が教えてくれたから……俺は外の世界に……」

「エレン！ 早く!!」

僕の伸ばした手はエレンの伸ばした手を

バクン

「うああああああ!!」

掴むことができなかった。

アルミン＝アルレルトの場合（後書き）

あれ？

一話で終わらなかった？

アルミン＝アルレルトの場合2（前書き）

あれ？ 本編までの挿入話なのに長くなった………そして投稿遅くなった

アルミン＝アルレルトの場合2

それからしばらくのことを僕は覚えていない。気がついたらコニーが目の前にいて、僕を揺すっていた。

なんで生き残ったのか、わからない。呆然としていた僕を捕まえて食べることもなんて簡単だろうに巨人はいつの間にかいなくなっていた。

コニーの班に助けられ、本部まで後退することになった。途中、あちこちで巨人に食われた仲間の残骸があった。

ハンナがフランツに蘇生術を行っていた。何度も何度も繰り返してもフランツは目を開けない。フランツには下半身がなかった。地獄そのものだった。

コニーの班と移動中に撤退の鐘が鳴った。ようやく撤退できる。僕達は補給班を探した。本部から定期的にガスを持った補給班が展開しているはずだった。でも、近くに補給班はいなくて、仕方なく本部までいくことになった。

補給班は来れないわけだ。本部は巨人に襲われていた。四方から15m救級が群がり、壁が破られて小型の巨人が内部に侵入しているようだった。あれでは、近づけない。

「ミカサ！ お前、後衛じゃなかったのか？」

みんなが絶望にうちひしがれているとき、後衛でとつくに撤退したと想っていたミカサがやってきた。

「アルミン、怪我はない？ エレンは？」

そう。エレンの最期を伝えなければならぬのはミカサだ。僕と同じくエレンの親友にして、エレンの家族。僕はどんな顔をしてミ

カサに伝えればいいのか。そもそも、ミカサに会わせる顔なんてなかった。だってエレンは僕の身代わりになって死んだも同然だった。

「ごめん！ エレンは僕の身代わりになって……」

どんなに罵倒されるだろう。どんなに蔑まれるだろう。でも、僕はそれを受け止めなければならない。その責任がある。

「アルミン、今は感傷的になっている時じゃない、生き残ることを考えなければならない」

ミカサは驚くほど落ち着いた声で僕に言った。エレンの死なんてまったく気にしていないかのように。

ミカサは剣を振り上げ、本部にたかる巨人に向けて突撃していった。ミカサの言葉はみんなに向けた激だったけども、足りないところはジャンが引き継いで発破をかけた。

ミカサは凄まじい速度で斬り進んでいった。僕たちじゃ、ぜんぜんおいつけない。でも、あんなにガスをふかしていたら

「あつ」

突然、ミカサが落ちた。ガス切れだ。

あわててコニーと助けにいく。15m級が迫っていたけど、間髪で間に合った。

すぐに僕のボンベをミカサの立体起動装置に取り替え、残っている刃もぜんぶ継ぎ足した。

この状況で立体起動装置が使えなくちゃ生き残れない。

首席で訓練兵ながら駐屯兵団の精鋭に加わるくらい腕の立つミカサと訓練兵団の中でも足手まといの僕。どちらが生き残るべきなのかは明らかだ。僕が残り、ミカサが生き残るべきなんだ。

それでも、生きたまま喰われるのだけは嫌だからミカサの柄に残った短い刃を手に取り、自分の首にそえた。

アルミン＝アルレルトの場合2（後書き）

結局、まだ原作の劣化コピー、オリジナルに入りたい

アルミン＝アルレルトの場合₃(前書き)

アルミン編がおわらない

アルミン＝アルレルトの場合3

「ただ、僕はそのまま刃を引くことはできなかった。」

「誰も置いていったりしない」

ミカサが刃を取り上げて、僕にそういった。僕だって死にたいわけじゃない。エレンが身代わりになってくれたのにそんな簡単には死ねない。でも、巨人がこんなにいる状況で人ひとりを抱えて飛び回るのは自殺行為に他ならない。ミカサもコニもわかってはいるはずなのに、2人とも僕を見捨てようとはしなかった。

だから僕も必死で考えた。どうすれば3人とも助かるのか。そしてその答えはすぐそこにいた。

「なんだ、ありゃ!？」

コニが声を上げた。ミカサも驚いていた。僕も驚いた。

近づいていた15m級が拳を振りかぶり、仲間であるはずの巨人の頭を殴り飛ばした。そして頭部を失って倒れた巨人のうなじを踏み碎いてとどめをさした。

「巨人が巨人を殺している？」

「しかも、弱点を理解して止めをさした？」

「格闘術の心得もあるような様子だった？」

とにかくこの巨人は僕たちを目標にしない。今も当たるを幸いにほかの巨人を蹴散らしている。奇行種。でも、これは使える。

「2人とも聞いてくれ、僕に考えがある」

2人に提案したのはこの巨人を本部まで誘導していくこと。僕たちだけじゃたどり着けないけど、この巨人がほかの巨人を排除しながら進んでくれるならなんとかなるかもしれない。

2人はすぐに僕の考えに賛成してくれた。コニが僕を抱えて、ミカサが奇行種の巨人に襲いかかる巨人を排除する。本部までの道には巨人があふれているからあととはかってに進んでくれた。

そして突入。危なかった。僕を抱えてくれていたコニのガスもミカサのガスもほぼからだった。

本部にはジャンやライナー達がすでにいた。さっきまでいた仲間が何人も欠けている。たくさん犠牲の上にとどりつけたらしい。でも、まだ危険が去ったわけじゃない。立て籠もっていた補給班の話によると補給所に相当数の小型巨人が入り込んでいるようだった。突入に成功した仲間もほとんどがガス切れ。そもそも狭い補給所の中では立体機動も思うようにできない。幸いなのは奇行種の巨人が外で暴れまわってくれているおかげでこれ以上は巨人が入ってこないこと。それもいつまでも持つかはわからない。

みんなが頭を抱えていた。補給所にいるのは7〜8m級とはいえ、立体機動装置なしでは立ち向かえない。

「アルミン、なんかいい手、思いつかないか？」

「え？ 僕？」

ジャンが僕に聞いてきた。

「お前、体力的にはどんげつだろうが、学科なら誰も寄せ付けないくらいの成績だったろ、お前のおかげで何度試験で救われたことか」「そう。私もエレンもアルミンのことを頼りにしていた。ジャンとは違うけど」

「ちよ、こら！ ミカサ！！」

ジャンとエレンがいう。

「ミカサとエレンが……？」

ありえない。僕はいつもエレンやミカサに助けてもらって、2人の背中を後ろから見ていた。そんな2人のようになりたいとも思っていた。その2人が僕のことを頼りにしていた。そんなことつて。

「アルミン、落ち着いて。貴方ならきつといい考えが思いつくはず」

ミカサが僕の目を見ながら言った。

考える、考えるんだ。今の状況を打開できる作戦……

「うん、思いついた。でも、みんなにはかなりの危険を冒してもらわないといけない」

僕が考えたのは憲兵兵団の装備品である小銃で散弾を使い、巨人の視界を一時的に奪う。それと同時にミカサ、ジャン、サシャ、コニ、アニ、ライナー、マルコの7人が梁を伝って背後から奇襲。一気に決められれば、被害を出さずに状況を打開できる。

「でも、僕の考えなんかでほんとにいいんだろうか。みんなを危険にさらして」

見つけてきた小銃に散弾を込めながら考える。この作戦で特に危険なのは斬りかかる7人だ。本当なら危険な役目は立案した僕こそやるべきなんだろうけど、残念ながら7人の誰にも僕の運動能力は劣っている。作戦の成功率を上げるために運動能力の高い仲間だけ

を選ぶ必要があった。

「関係ないね」

「誰がやっても、失敗するときには失敗する」

「それにこれ以上考えてもいい案は出てこないよ」

装備の確認をしていたライナー、アニ、マルコが言ってくれた。

「それよりしつかり巨人の目をつぶしてくれよ。飛びかかったら巨人と目が合うなんて簡便だからな」

コニが僕の肩を叩いて笑いながら言った。うん、みんな僕を信頼してくれている。僕もみんなを信頼しなくちゃ。

「よし！ みんな、装備を確認したか！ 行くぞ！！」

「「「おおー！！」」」

ライナーの声に全員が唱和した。

アルミン＝アルレルトの場合3（後書き）

まだまだ続くアルミン編

アルミン＝アルレルトの場合4（前書き）

連続投下。PCだと早い

アルミン＝アルレルトの場合4

作戦は成功した。コニとサシャが失敗してひやひやしたけども、ミカサとアニがすぐにフォローしてくれたおかげで事なきを得た。ジャンの指揮でガスの補給作業を始める。次から次へとガスを補給していく。まだ巨人は入ってこない。あの奇行種の巨人ががんばってくれているらしい。

巨人のかわりにまた仲間が合流してきた。ウエスカーとレオンの2人だ。最前線で戦っていたらしいが、なんとか戻ってこれたらしい。2人もガスを補給して脱出の準備をする。

「全員、ガスは補給したな！！ 一斉に出るぞ！」

ライナーの合図でみんなが飛び出していく。まだ安全になったわけじゃない。ウォール＝ローゼまでたどり着かなきゃいけない。

僕もコニたちと飛び出そうと準備をしていると、ウエスカーが本部の屋上に向かって登って行った。レオンもあわててついていく。早く脱出しなければならぬのに、どこにいくんだらう。不思議に思っ
ってミカサと一緒に追って驚いた。

「ウエスカー！？ なにしているのさ！ 逃げないと！」

「緑の巨人？ また新種？」

本部の前では見たこともない緑色の巨人がいた。また奇行種？
しかも、この巨人はさっきの巨人とも今までの巨人とも違う。

「大丈夫だ、アルミン、ミカサ。こいつは人の意思がわかる。襲ってこない」

この巨人も襲つてこない？ 人の意思が分かるだつて？ そんなこと、ありえない……なんて言えない。ついさっき、そんな巨人を見たばかりだ。

「なあ、ウエスカー。今、この巨人しゃべらなかつたか？」

続いて上がってきていたライナーがぼつりとつぶやいた。そう、僕も聞いた。目の前にいる緑の巨人が唸り声や咆哮とは違う、意味があるような言葉を発したような気がした。僕たちの反応を見て、ウエスカーがにやにやしながらこの巨人は人の意思を解すということを改めて説明してくれた。今日は驚いているばかりだ。

『少し、わかる』

「ミカサさん！？ 今、何て言ったの？」

もう驚くことなんてないと思っていたら今度はミカサが聞いたことのない言葉で話した。さっきまで得意げに説明していたウエスカーがあんぐりと口をあけて驚いている。

ミカサに説明を求めると、ミカサのお母さんから教わった言葉で、巨人とちゃんと言葉を交わすことができているらしい。

そして巨人は屋上にさらに近付くと、なんとその胸が開いた。そしてその中から人が降りてきた。もう、なにがきても僕は驚かないかもしれない。

緑の巨人の中から降りてきたのは人間のようだった。ただ見たことのない緑色の服を着て、腰にはなにかポーチをつけていた。

ミカサが緑の人と何事が言葉を交わした。言葉がわからない僕は剣を抜いて、万が一、何かあればミカサを助けられるように身構えた。だけど、ミカサがこっちを向いて、剣を下ろすように指示し

てきた。僕らが指示に従って剣を下ろすと緑の人はほっとしたようだった。巨人を操っているのに、剣程度が怖いのかな。

ミカサが戻ってきて、緑の人と話したことを説明してくれた。

緑の人は、コウスケ「フルカワ中尉と名乗り、少なくとも僕たちと同じ人間らしい。そして僕たち人類に協力を申し出ている。

「どうすればいいと思う？ アルミン」

「……それが本当なら大変なことだよ、とんでもない味方ができるってことじゃないか」

もし、あの緑の巨人が自在に動かせるならこれほど心強い味方はないだろう。

「でもよ、あいつ信用できんのか？ ウォール「ローゼまで連れて行って裏切ったりしたら」

ライナーが異議を唱えた。たしかに、あり得る。なんたって相手は巨人だ。

「だいじょーぶだよ、ライナー。あいつは信用できる」

「ウエスカー？ なにを根拠に言ってるんだ？」

「なんで、俺とレオンが最前線から生きて帰ってこれたかわかるか？ あいつが援護してくれたおかげなんだよ！ なあ、レオン？」

「ああ、そうだが、ライナー。あいつのことは俺たちが保証する」

「ウエスカーはともかく、レオンは……」

「ため、ミカサー！！ 俺がいいこと言ってるのに何言いやがる！」

ミカサに殴りかかったレオンがしばかれているけど、2人の話が本当なら緑の巨人は信用できそうだな。よし。

「ミカサ、今は信用していいと思う。少なくとも人は襲わない、巨人は殺す。それだけでも十分だよ。それにもし裏切ったとしても巨人にはローゼの壁は越えられない」
「わかった。アルミンがそういうなら」

ミカサは緑の人のところに決めたことを話に行った。

「おい、アルミン。あれ」

ジャンが緑の巨人がいる方とは反対側を指差した。そつちをみるとあの奇行種の巨人が多数の巨人に抑えつけられて体を食われていた。

「体が再生できていないのか？」

「もう限界なんだろうよ、どうする？」

ジャンは僕に聞いてきた。助けるかということだ。こつちの巨人は緑の巨人と違って意思は通じないけどもほかの巨人を殺してくれる。利用価値はまだありそうだった。

「助けるか、あれも味方なら心強いしな」

「ライナー」

ライナーが獰猛な笑みで剣を抜いた。

しかし、助ける必要はなかった。抑え込まれた奇行種の巨人がとてつもない咆哮を発するとまとわりついていた巨人をはがし、ほかの巨人に叩きつけ、踏みつぶした。

「……誰を助けるって？」

「あ、あははは……」

圧巻の強さだった。助ける必要なんてなかった。下手をしたら巻き込まれていたかもしれない。

「ああ、でも限界か」

巨人がゆっくりと倒れていく。失われた両腕や食いちぎられた箇所は再生せず、体中から蒸気を吹き上げゆっくりと消えていく。ほかの巨人と一緒にだった。

「ミカサ？」

突然、ミカサが降りて行った。倒れて蒸気を吹き上げる巨人のうなじあたりをめぐけて。そしてうなじからなにか、いや、誰かを抱き起した。胸に耳を押し付けると、すぐさま誰かを抱えて戻ってきた。

ミカサはへたりと座り込むと誰かを、いや、僕もミカサもよく知っているその人を抱きしめて、大声で泣き始めた。

「エレン………いつたい………」

戦死したはずのエレンがいた。

アルミン＝アルレルトの場合4（後書き）

次でアルミン編は終わりです。終わらせませす。早くオリジナル展開させてほしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5369x/>

緑の巨人、荒野を往く

2012年1月3日00時50分発行